

イングリット・フリッター ピアノリサイタル

1部

- ピアノ・ソナタ 第18番 変ホ長調 Op.31-3
.....ベートーヴェン

- ピアノ・ソナタ 第17番 二短調 Op.31-2 「テンペスト」
.....ベートーヴェン

2部

- ワルツ.....ショパン
第2番 変イ長調 Op.34-1 「華麗なる円舞曲」
第10番 口短調 Op.69-2 遺作
第6番 変ニ長調 Op.64-1 「小犬のワルツ」
第7番 嬰ハ短調 Op.64-2
第8番 変イ長調 Op.64-3
第1番 変ホ長調 Op.18 「華麗なる大円舞曲」
第11番 変ト長調 Op.70-1 遺作
第19番 イ短調 遺作
第16番 変イ長調 遺作
第5番 変イ長調 Op.42 「大円舞曲」

秋

四季コンサート²⁰¹⁰

2010年10月11日(月・祝日)6:45PM

会場:浜松市教育文化会館

主催:浜松音楽友の会

プロフィール

1973年アルゼンチン・ブエノスアイレス生まれ。アルゼンチンでエリザベス・ヴェシュターカンプについてピアノを始め、僅か11歳の時にデビュー。92年にフライブルク音楽大学にて研鑽を積んだ後、94年にはローマに移り96年からイタリア・イモラの「インコントロ・コル・マエストロ」音楽アカデミーで、フランコ・スカラ及びボリス・ペトルシャンスキイ両教授に師事する。2006年ギルモア・アーティスト(4年に1人を選出)に選ばれた。16歳の時のコロン劇場でのデビュー以来、世界各地における数多くの演奏が評価されての受賞である。2000年にはワルシャワのショパン国際ピアノコンクールで第2位に輝いている。これまでに、コンセルトヘボウ(アムステルダム)、リスト音楽院ホール(ブダペスト)、アルテ・オーバー(フランクフルト)、カーネギーホール(サンケル・ホール)、メトロポリタン美術館などの名高いホールで演奏。また、ベルリン交響楽団、ハンガリー国立管弦楽団、サンクトペテルブルク交響楽団、クリーヴランド管弦楽団、ロサンゼルス・フィル、サンフランシスコ交響楽団、バンクーバー交響楽団など、著名なオーケストラと協演を果たすほか、世界中で開催される、数多くの音楽祭にも積極的に参加。特にケネディ・センターでのアメリカ・デビュー・リサイタルは、「『音楽的な知性』と『温かい人間性』がステージ上で共演した」と、ワシントン・ポストに評された。

録音は、2008年に『ショパン作品集』、2009年に『ショパン:ワルツ全集』がEMIからリリースされている。

イングリット・フリッター
ピアノリサイタル



INGRID FLITTER
PIANO RECITAL

●ベートーヴェン／ピアノ・ソナタ 第18番 変ホ長調 Op.31-3

ベートーヴェンの遺した32曲のピアノ・ソナタは、音楽史上に輝く金字塔である。その創作にあたってベートーヴェンは常に前作の否定から出発し、ピアノの楽器としての発達、変遷を伴って作曲したため、すべてが独自の多様性に富み、決して類型的な様式を踏襲していない。

この「第18番」においても、ベートーヴェンは伝統的な手法から逸脱し、斬新な創意の閃きを示している。つまり全4楽章に編成樂章を用いず、第2楽章にはスケルツォ、第3楽章にはメヌエットを置き、アレグロ～スケルツォ～メヌエット～プレストという構成は、後年の「交響曲第8番」との類似性を見せる。全体に明るい曲調が支配しているが、ピアニスティックな輝きと均整の取れた造形が見事なバランスで共存し、また流れを阻害する障害的要素や突然のテンポの変化も十二分に活用されており、ドラマティックな効果を増幅させている。

●ベートーヴェン／ピアノ・ソナタ 第17番 ニ短調 Op.31-2 「テンペスト」

弟子のシントラーがこの作品についてベートーヴェンに尋ねると、「シェイクスピアの戯曲『嵐(テンペスト)』に触れよ」と答えたとされるが、今日では疑問視されている。ベートーヴェンは、この作品においてもソナタ形式に斬新な試みを探り入れた。それはまず第1楽章での緊張と弛緩の屹立である。激情が強烈、咆哮するアレグロでの、しばしばその流れを堰き止めるようなラルゴやアダージョは斬新で、壮大なコントラストは激情をさらにドラマティックに高める効果を生んでいる。また大胆な楽想や多彩な転調も特徴的で、常に前作を否定することで新しいものを生み出そうとするベートーヴェンの強烈な意志が明確に表れている。

『テンペスト』の名で親しまれているこの作品は、「嬰ハ短調(第14番《月光》)」や「嬰ヘ長調(第24番)」と並んでベートーヴェンのピアノ・ソナタ32曲の中では唯一となるニ短調で書かれている。1802年に作曲された。

第1楽章 ラルゴ～アレグロ～アダージョ～ラルゴ～アレグロ ニ短調 2/2拍子

第2楽章 アダージョ 変ロ長調 3/4拍子

第3楽章 アレグレット ニ短調 3/8拍子

●ショパン／ワルツ

ワルツは13世紀頃、チロル地方とバイエルン地方で発祥した農民の舞踊である。踊りが官能的なため宫廷や教会では禁じられた時期もあったが、ワイン会議の頃を境にたちまち人気を博してヨーロッパ全土を席巻、シュトラウス父子やランナーなどによる名作が数多く生まれた。一方で21曲を数えるショパンのワルツは、マズルカのような風趣を含んだ独自の方向性を確立し、ウインナ・ワルツとは一線を画す叙情的な雅趣と芸術性が与えられている。

第2番 変イ長調 Op.34-1 「華麗なる円舞曲」

ドレスデンの貴族ヴァジンスキ家を訪ね、その子女マリアに恋した1835年に作曲され、1838年に出版された。16小節の序奏を持ち、5つの主題が現われ、最後に華々しいコーダを置いている。

第10番 口短調 Op.69-2 遺作

1829年に作曲され、没後の1852年に出版された。ロンド風の三部形式で書かれていて、マズルカの一種であるマズルのリズムに彩られている。

第6番 変ニ長調 Op.64-1 「小犬のワルツ」

1846年から翌年にかけて作曲され、1847年に出版された。ジョルジュ・サンドが飼っていた犬が、自分の尻尾をくるくる追いかける様子を描いたとされる。

第7番 婦ハ短調 Op.64-2

作品64は3曲からなり、成立も同時期である。この作品は、回顧的な語り口と甘美な哀愁が全編を支配している。

第8番 変イ長調 Op.64-3

1846年から翌年にかけて作曲され、1847年に出版された。明るく喜びに満ちたワルツで、転調を多用しながら厳密な構成で展開する。三部形式にコーダが付いている。

第1番 変ホ長調 Op.18 「華麗なる大円舞曲」

ワインからシトウットガルトを経てパリに到着した1831年から翌年にかけて作曲され、1834年に出版された。ショパンのワルツの中でも輝かしく華麗であり、変化に富んだ楽想が展開する。

第11番 変ト長調 Op.70-1 遺作

1832年作曲、親友フォンタナにより1855年出版。スピーディーでコケティッシュ、華やかな作品である。

第19番 イ短調 遺作

1847年に作曲され、1955年に出版された。ロンド形式風であり、簡潔な伴奏に乗って淡々とした旋律が歌われる。

第16番 変イ長調 遺作

1830年頃作曲されたと考えられ、1902年に出版されている。短いトリオを持つロンド風三部形式で、16分音符が範囲なく続く。

第5番 変イ長調 Op.42 「大円舞曲」

1840年に作曲されて、同年出版。マズルカのひとつであるオペレクのリズムが軽やかに疾走しながら、エレガントな風趣も漂う。